

1) 『弱法師』

謡曲。観世元雅（1400頃?-1432）作（曲舞は世阿弥作）。世阿弥自筆能本（1429年）の、1711年臨模本が現存する。作品の典拠は不明だが、説教『しんとく丸』と同工である。一時中絶していたのが、元禄（1688-1704）頃復曲。現行台本は後世の改変とされる。

高安通俊は人の讒言を信じて一子俊徳丸を館から追放したが、その後無実がわかって、行方の知れぬ俊徳丸のために天王寺で施行を行う。施行の場に、盲目となって乞食の群れの中で弱法師と呼ばれている俊徳丸を見つける。通俊は夜になってから人目を避けて俊徳丸を連れ帰る。この作品は主人公俊徳丸の、逆境を超越した澄み切った諦観を描くことに力点が置かれている。

2) 『しんとく丸』

説経浄瑠璃。現存する最古の本は、佐渡七太夫正本の正保5年刊本だが、成立は中世末にまでさかのぼる。この他に先にあげた、天和・貞享期頃の江戸うろこがたや孫兵衛版もある（こちらは以後略称として江戸版『しんとく丸』と記す）。

高安信吉長者は清水観音に申し子として、しんとく丸を授かる。しんとく丸13才の時に実母が死に、継母が迎えられる。継母は美しいしんとく丸に邪恋をしかけ、拒否された恨みで清水観音に、しんとく丸が「人のきらひし違例」（「癩」を意味する）になるよう呪詛。ためにしんとく丸は「三病」（「癩」を意味する）となって失明し、天王寺に捨てられる。清水観音のお告げに随って熊野の湯に行く途中、婚約者乙姫の館へ、それと知らずに施行を受けに立ち寄る。ここで館の女房達に笑われて恥ずかしく思い、天王寺に引き返し、餓死することを決意する。しかし、しんとく丸を追って館を出てきた乙姫と天王寺で巡り会い、ともに清水観音に詣で、観音から授かった鳥箒で目を撫でると、病が本復する。二人は結ばれて乙姫の館で幸せに暮らす。一方、信吉長者は盲目となって零落し、天王寺で継母とその子、乙の二郎と共に乞食をしていた。しんとく丸が天王寺で行った施行の場で父子は再会する。しんとく丸は父を連れ帰るとともに、継母と乙の二郎の首を切る。

3) 『弱法師』

浄瑠璃。近松門左衛門作、竹本義太夫正本。1694年、大坂にて初演。ほとんどの構成は1661年刊行の古浄瑠璃「しんとく丸」に拠っている。天王寺における善光寺出開帳にあわせて作られた作品であるため、善光寺の御利益が強調された展開となっている。

河内の長者左衛門尉通俊の死後、嫡男俊徳丸と次男次郎丸との跡目争いとなり、次郎丸の母の呪詛によって俊徳丸は「癩」になる。次郎丸一派によって、家臣藤太と共に館を追い出され、藤太の家に身を寄せる。だが薬代がかさむため、藤太一家の経済的負担を思い、また業をさらすために、自ら天王寺へ行く。非人乞食の中に混じって暮らす、「癩」による中途失明のため足元がおぼつかず、よろめきながら歩くので「弱法師」とあだ名された。婚約者露の前による天王寺での施行の場で露の前と巡り会い、彼女が持っていた善光寺の印文の御利益で、病が本復する。